

家族の愛が息子を甦らせる

よみがえ

8年前、幸せな家庭は突然暗闇の中に突き落とされた。その1年4カ月後、奇跡は起こる。義博さんの「覚醒」。親子は回復を信じ、懸命なりハビリを始めた。親子の絆と命の尊さを伝える親子展が、9月13日美術館で開かれた。

【事 故】

小学6年生の夏。息子を喜ばせようとクワガタ採りに行った。「ほんの少し・ほんの少し」目を離した時の出来事だった。「ドン」という鈍い衝撃音に振り返ると、息子は車にはねられ、側溝にはまり込んでいた。すぐに病院に搬送したが、事態は深刻だった。脳幹を損傷し、全身を複雑骨折。脳内の出血も激しく、肺も破れていた。医師からの宣告はあまりにも残酷なものだった。「助からないかもしれない。助かっても意識が戻ることはないでしょう」。目の前が真っ暗になった。「せめて命だけでも……」。家族の強い祈りと、義博さんの生命力の強さから奇跡的に一命をとりとめた。事故から2週間後に自発呼吸ができるまでになったが、それ以上の回復はなかった。この時から長く険しい道のりが、義博さんと家族に待っていた。

【びまん性軸索損傷】

義博さんの病名は「びまん性軸索損傷」。

「びまん性」とは「広範囲」という意味で、「軸索」は、脳の内部で神経細胞をつなげる働きをしているもの。つまり「びまん性軸索損傷」とは、この軸索が広範囲に傷つけられたもので、事故によって頭部に回転性の外力が加わったことが原因だと考えられました。

【父親の思い】

当時、義信さんは「現場に連れて行った自分を責め、常に自殺することを考えていた。自殺をしようとして冷水域に行つてトラックに飛び込もうとした時、偶然携帯電話が落ちて思いとどまった」と振り返る。極限の心理状態の時に、息子が意識を取り戻した。「この子に命を救われたんですよ」と義信さん。

【妹の思い】

事故がある前まで、活発な兄をなにより自慢にしていた妹。

名古屋の病院で脳に電気を与え治療を受けるため、一家で名古屋に滞在していた。両親は病院につきっきりであったため、当時8歳だった妹はアパートで常に一人で両親の帰りを待っていた。

しかし、弱い気持ちを隠せることはなく、気丈に明るく振る舞っていた。半年たつても効果が現れないため、名古屋での治療をあきらめ、一家で田川に帰った。田川に帰って友達に会つた妹は、大粒の涙を流した。この時、両親は「この子も相当な我慢をしていたんだ」ということを再確認したという。

今では、妹は「どんな状態であっても、お兄ちゃんはお兄ちゃん。お兄ちゃんが一番好き」と言っているという。

【優しさ】

義博さんが意識を取り戻した時、義信さんは「あんな場所に連れて行つてごめんね」と伝えた。すると義博さんは「お父さんや妹でなく、自分でよかった」と答えた。息子のやさしさに涙が止まらなかった。「僕は飛び出していい。道の端に立っていて何も覚えていない」という事故当時の話を義博さんから聞かにつれ、義信さんは加害者に不信感を抱くようになり警察に何度も行き来していた。その姿をみた義博さんは「お父さん、もう相手を許してやって。相手の幸せを祈つてやろうや」と義信さんを諭した。この出来事であらためて息子の優しさに触れた感じがしたと義信さんは語った。

【リハビリ】

現在は自宅や施設・プールなどでリハビリを行っている。プールでのリハビリでは自分の意志で足を曲げたり、伸ばしたりできるまでになり、少しずつ回復の兆しを見せているという。

【笑い】

「あの事故以来、3年間笑うことはなかったが、今その時間以上に笑わせてもらっている。義博もあの時間を取り戻すかのようにいつも笑っている。人間笑顔が大事ですよ」と義信さんは話す。



健常者と障害者が一人の人間として支え合っていくという思いを書いたもの

【よみがえった瞬間】

名古屋の病院から田川に帰ってきたある夜、いつもと変わらない食卓を囲んでいた。義信さんが娘に勧められ持っていたカツラを何気なくつけて義博さんの前でおどけて見せた。その瞬間、ほんの少し「にこっ」と笑った。「みんな義博が笑ったぞ」。思わず声が出た。これが1年4カ月ぶりに義博さんが意識を取り戻した瞬間だった。「病院でどんな治療を受けるよりも、義博にとつては『家族と一緒にいる』その事が一番効果があったのかもかもしれない」と義信さんは当時を振り返る。「義博は今でも病院に行くこと寂しそうな顔を

【リンゴの唄】

「赤いリンゴに、口びるよせてだまつてみている。青い空」当時、義信さんは病院の帰り道や、何も言わない息子の耳元でこの「リンゴの唄」を毎日歌っていた。義博さんは意識を取り戻すと、この歌の1番をすべて歌った。息子は意識がなくても、表現ができなかっただけで、ちゃんと自分の歌が聞こえていたんだということを実感した。「あれだけ毎日耳元で歌われたら、いやでも覚えるよ」と義博さんは笑顔で答えた。

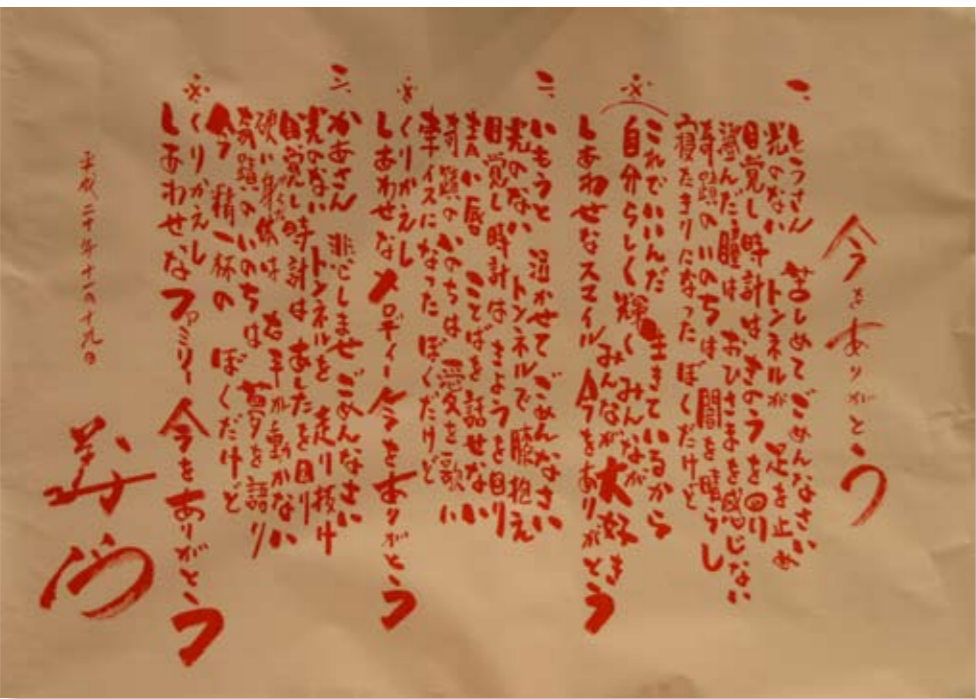
【希望】

「義博は、今はまだ家族や他人の力なしでは生活できない。これから先、自分の特技を生かして、自立して自分の力で生きていけるようになってほしい」と義信さんは願う。

義博さんに夢はなんですか？と尋ねると「サッカーをして思いきり外で走り回りたい」と答えてくれた。

【切実な思い】

「義博がわたしの人生の師匠です。8年間もがき苦しんできたが、生きてさえいれれば何とかなる」と語る義信さん。「今思うのは、世の卑弱い立場の人に目を向けていないように感じる。もっと弱い人の立場に立って、あなたかい目で見守ってほしい」と切実な思いを言葉にした。



義博さんが家族への思いをつづった詩。



義博さんの詩に義信さんが作曲をした歌を親子で奏でる様子。